

業務用タマネギの新作型開発

～労力分散と規模拡大を可能とする2月定植の新作型を提案～

長屋浩治（農業総合試験場東三河農業研究所）

【平成25年5月20日掲載】

【要約】

夏まきキャベツと組み合わせて栽培する2月定植の業務用タマネギの安定生産技術を開発した。育苗は、無加温ハウスの利用により、10月下旬の播種でも良苗が育成できた。定植時期は2月中旬が適し、品種は「ネオアース」、「さつき」、「もみじ3号」が適した。本作型の導入により、播種、定植、収穫の労力が分散され、1月どりのキャベツ作まで組み合わせて栽培することができ、タマネギの規模拡大も可能である。

1 はじめに

東三河地域の主要品目である秋冬どりキャベツは、春夏作の露地メロン、スイカ、スイートコーンなどと組み合わせて栽培されている。しかし、これらの春夏作では、トンネルの設置などの労力や経費の負担が大きいことが課題となっている。

業務用タマネギは、機械化栽培に適し省力的であることから、秋冬どりキャベツとの組合せが期待できる。ただし、慣行のタマネギの作型は、11月下旬から12月上旬に定植するため、組み合わせるキャベツの作型は、10月下旬から11月上旬どりに限定されている。そこで、組み合わせるキャベツの作型を1月下旬どりまで拡大できる2月定植の業務用タマネギの作型について、安定生産技術を検討した。

2 試験方法

○試験1 育苗場所と播種時期について

育苗場所は、無加温ハウスと露地で比較した。播種は、324穴セルトレイを用い、無加温ハウスでは2008年10月17日、10月31日、11月16日に、露地では2008年10月17日に行い、地床育苗した。品種は、「ネオアース」、「さつき」、「もみじ3号」を供試した。定植は、2009年2月12日にうね幅120cm、株間15cmの4条植えで、露地に移植機を用いて行った。試験2～4の育苗方法、定植方法、供試品種は、断りのない限り試験1と同様とした。

○試験2 定植時期について

定植日として2010年2月5日、2月16日、2月25日の3区を設けた。2009年10月23日に播種後、無加温ハウスで育苗した。

○試験3 品種について

中生種から晩生種の計20品種を供試した（表1）。2009年10月26日に播種後、無加温ハウスで育苗し、2010年2月12日に定植した。

○試験4 栽植密度について

栽植密度として2778株/a（株間12cm）、2222株/a（株間15cm）、1852株/a（株間18cm）の3区を設けた。2009年10月30日に播種後、無加温ハウスで育苗し、2010年2月14日に定植した。

3 結果

○試験1 育苗場所と播種時期について

いずれの品種も、10月17日播種と10月31日播種の無加温ハウス育苗が、苗の生育が優れ、1球重が重く、可販球収量も多かった(写真1)。



写真1 播種時期の違いと苗の生育
左から10/17、10/31、11/16(以上、無加温ハウス)、10/17(露地)の播種、品種は「ネオアース」

○試験2 定植時期について

「ネオアース」と「さつき」では、2月16日定植が最も1球重が重く、可販球収量も多かった。「もみじ3号」は、定植時期の1球重と可販球収量への影響はみられなかった。

○試験3 品種について

慣行作型との労力分散には倒伏期が遅いことが望まれる。そこで、倒伏期、可販球率、1球重、乾物率を検討したところ、「ネオアース」、「さつき」、「もみじ3号」が新作型に適した品種と考えられた(表1)。

表1 供試品種の倒伏期、可販球率、1球重、乾物率

品種	倒伏期 (月/日)	可販 球率 (%)	1球重 (g)	乾物率 (%)
アンサー	6/1	100	394	10.0
ターザン	6/5	100	375	10.1
M-741	6/7	94	410	10.1
アトン	6/7	100	418	9.4
七宝甘70	6/8	100	465	8.6
ノンクーラー	6/10	92	328	11.7
ターボ	6/10	94	420	9.7
平安球型黄	6/10	97	290	12.0
ネオアース	6/10	97	394	10.0
アタック	6/10	99	377	11.0
さつき	6/10	100	397	10.7
パワー	6/11	100	365	11.3
泉州中高黄	6/14	61	440	8.5
キーパー	6/15	61	402	9.7
あまがし2号	6/15	64	434	9.0
スワロー	6/15	75	467	9.0
もみじ3号	6/17	100	446	9.1
淡路中高黄	6/21	39	472	7.8
キング泉州	6/24	63	437	8.4
ラッキー	7/2	8	472	8.7

○試験4 栽植密度について

2222株/aの栽植密度が、2Lサイズの割合が多く、単位面積あたりの収量も確保できた。

4 現地導入に向けた展望

今回開発したタマネギの新作型は、慣行の作型との播種、定植、収穫の労力分散に加え、組み合わせて栽培するキャベツの作型が1月下旬どりまで拡大できることが特徴である(図1)。本県は冬季でも比較的温暖な地域が多く、新作型の利用範囲は広い。タマネギ産地の発展に向けて、現地への新作型の導入が期待される。

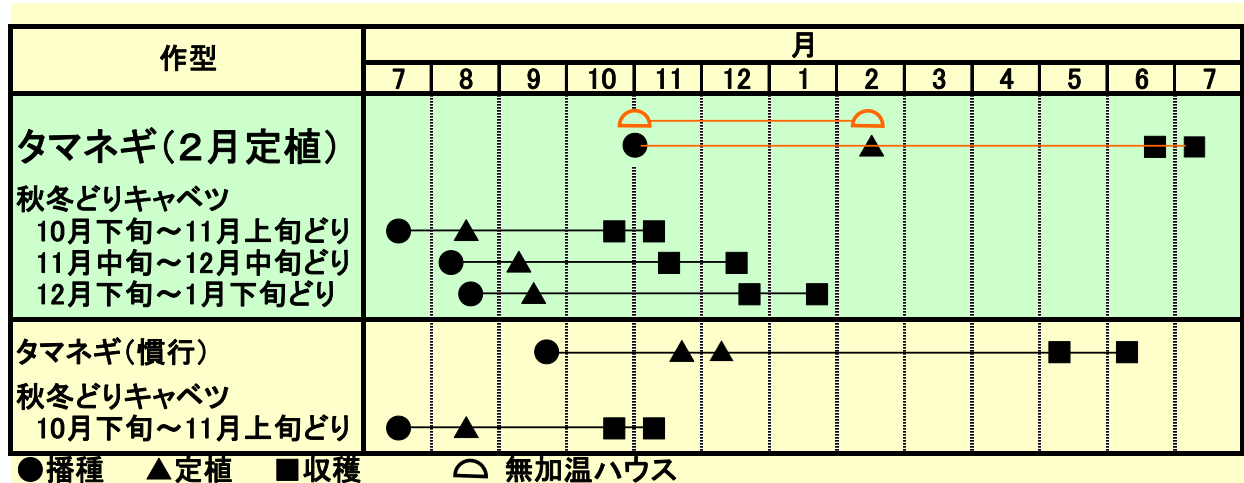


図1 無加温ハウス育苗による2月定植タマネギと夏まきキャベツの作付け体型